様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７００３６

研究課題名（和文）相対主義の歴史的起源の解明－新視点からのアプローチ－

研究課題名（英文）Historical Origin of Relativism in Ancient Greece

研究代表者
中澤　務（NAKAZAWA, Tsutomu）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：１０２４１２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：相対主義の歴史的起源とその現代的意義の解明のために、紀元前5世紀ギリシアのソフィスト・プロタゴラスの思想と、彼の影響下に形成された同時代の相対主義的思潮を総合的に分析した。(1)プロタゴラスの人間尺度説をめぐるテキストの分析と解釈の再検討、(2)人間尺度説から形成される彼の社会・政治思想の全体像の解明、(3)プロタゴラスの影響下で展開されたノモスとピュシスをめぐる論争の総合的な解明等を通して、相対主義の起源としてのプロタゴラスの意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project has studied the thought of Greek sophist Protagoras and the debate of relativism of his age to investigate the historical origin of the Relativesim and its modern meaning. In particular it analysed (1)texts of Protagoras' Homo-Mensura Thesis, (2)his relativistic social and political thought, (3)debates concerning the Nomos-Physis antithesis.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：相対主義　ソフィスト　プロタゴラス　人間尺度説　ノモスとピュシス

１．研究開始当初の背景

(1) 相対主義（relativism）の思想は、現代社会において重要な役割を果たしており、哲学・倫理学ばかりでなく、あらゆる分野に大きな影響を及ぼしている。相対主義を批判的に鍛え上げ、より妥当で包括的な相対主義の理論を構築していくことは、現代の哲学・倫理学に課せられた最大の課題のひとつである。

(2) このとき、相対主義の理論的構築において重要となるのが、歴史的研究である。なぜなら、現代の相対主義は、紀元前 5 世紀の古代ギリシアに発し、その後の論争を経て構築されたものだからである。とりわけ、ソフィスト・プロタゴラスの提示した「人間尺度説」と、プラトンによるその批判は、相対主義の形成に大きな影響を及ぼしている。

(3) ところが、現代においては、プロタゴラスの人間尺度説や、同時代の紀元前 5 世紀におけるソフィストたちの思想と活動が持つ歴史的意義は、正当に評価されているとはいいがたい状況にある。このような、不当な評価の背景には、(a)プロタゴラスの人間尺度説が提示された、紀元前 5 世紀ギリシアの社会的・思想的背景に対する無理解と、(b)プラトンによる解釈と批判の無批判的な受容が存在していると考えることができる。

(4) こうした状況を乗り越えて、新しい視点からプロタゴラスらの思想を意義づけ、相対主義の歴史的起源を解き明かそうとする研究は、欧米では比較的盛んにおこなわれている。ところが、これに比較すると、わが国では、これらの思想家たちの意義が十分に認識されているとはいいがたい状況にあると評価できる。

(5) 研究代表者は、これまでソクラテスの倫理思想を中心とする一連の研究の過程において、ソフィストたちの思想の重要性を認識するに至り、新たな視点から、ソフィストの思想と活動を意義づける作業に取り組んできた。

(6) 本研究は、以上のような状況を背景にして、紀元前 5 世紀の相対主義思想全般の再検討と再評価をさらに進めることを目指して企図されたものである。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、以上のような学術的背景に対して、プロタゴラスの相対主義の思想を、彼の思想全体、さらには、その背景にある紀元前 5 世紀の思想的文脈の中で再解釈・再評価することを目指す。そして、相対主義の歴史的起源を、この新しい視点からのアプローチを通して解明する。これによって、この時代の相対主義の思想が有していた豊かな内容を明らかにするとともに、それが現代の相対主義の思想に対して持つ意味を明らかにすることが、本研究の最終的な目標となる。

(2) 本研究が目指す具体的な目標は、以下のとおりである。

①プロタゴラスの人間尺度説を詳細に検討し、妥当な解釈を提示する。

②プロタゴラスの社会・倫理思想、および言語思想の全体像を総合的に解明し、そこにおいて相対主義思想が有していた役割と意味を解明する。

③紀元前 5 世紀における多様な相対主義的思潮と、プロタゴラスの思想の関連を考察し、当時の論争の意味を総合的に解明する。

④以上を通して、現代の相対主義思想の歴史的起源として、当時の論争が持っていた現代的意義を考察する。

３．研究の方法

(1) 本研究では、研究全体を４つのフェーズに区分し、研究を遂行する。研究は、研究テーマに対応した 3 つの基礎的研究と、全体の成果をまとめる総合的研究によって構成される。初年度より、基礎的研究１から順次着手し、3 年間の基礎的研究を推敲したあと、最終年度において、総合的研究を遂行し、研究をまとめる。

【基礎的研究 1】プロタゴラスの人間尺度説をめぐるテキストおよび、プラトン・アリストテレスなどの当時の解釈や批判を詳細に検討し、妥当な解釈を提示する。

【基礎的研究 2】プロタゴラスの社会・政治思想の全体像を、プラトン『プロタゴラス』の分析を通して解明し、人間尺度説との関係を解明する。また、ロゴスをめぐるプロタゴラスの断片を再解釈し、彼の言語思想の全体像を明らかにすると共に、人間尺度説との関係を解明する。

【基礎的研究 3】「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」の問題を中心に、当時の民俗学的論争や、医学思想、政治思想、弁論術などの多様な論争の文脈を検討し、紀元前 5 世紀の相対主義思想の全体像を明らかにすると共に、その中にプロタゴラスの思想を位置づける。

【総合的研究】3 つの基礎的研究を踏まえて、相対主義思想の歴史的起源に対する新しい知見を提示すると共に、研究成果がギリシア哲学史全体に対してもたらす意味を考察する。

４．研究成果

(1) 基礎的研究１の研究成果

基礎的研究１においては、プロタゴラスの人間尺度説をめぐるテキストおよび、プラトン・アリストテレスなどの当時の解釈や批判を詳細に検討し、妥当な解釈を提示した。

人間尺度説をめぐっては、多様な解釈が存在しているが、現代における解釈は、彼の相対主義思想を、現代的な相対主義の枠組のなかで理解しようとしている。基礎的研究１では、そのような現代的解釈が妥当であるのかを詳細に検討し、現代的解釈の誤りを指摘すると共に、より妥当な解釈を提示した。

現代の解釈は、プラトンの『テアイテトス』を典拠とし、そのテキスト解釈にもとづいて、人間尺度説を、感覚主義、主観主義、真理の相対主義などの特徴を持つ理論として理解しようとしている。そこで、まずは、これらの解釈の妥当性を再検討し、そこに、プラトンのテキストの誤解釈が含まれていることを明らかにした（具体的な議論は、論文① pp.91-97 および論文⑦）。

つぎに、人間尺度説の正当な解釈を、当時の文化的背景を考慮に入れて、考察し、より妥当な解釈を提示する作業をおこなった。主な論点は、以下のとおりである。

◎「尺度（メトロン）」をめぐるプラトンの解釈と説明は、プラトン自身の哲学的認識論の枠組に依拠したものであり、プロタゴラスの真意を反映していない。プロタゴラスが意図するメトロンは、紀元前 5 世紀以前の伝統にもとづいており、世界の事物を計測し分節化する役割を果たすものである。人間が世界のメトロンであるとは、人間が世界を計測し、世界に秩序を与えていく存在であるという人間原理の表明として解釈できる。

◎プロタゴラスは、「人間」によって、世界を経験する人間を意味しており、けっして、主観的な個人を意味してはいない。

◎人間がそのメトロンとなる「万物」とは、人間の前に現れる経験的世界であり、プロタゴラスは、世界を、人間が生きる人間的な世界として提示しようとしている。

以上のように、人間尺度説とは、プロタゴラスによる紀元前 5 世紀の知的精神の表明であり、世界を秩序付けるためのメトロンの重要性が増していた紀元前 5 世紀において、世界の姿を解明し、秩序づけるメトロンたりうるのは、人間自身であることを表明した宣言であることが明らかとされた。

これによって、人間尺度説における相対主義の思想は、現代における相対主義とはまったく異なるものであったこと、そして、それは紀元前 5 世紀における知的風土と密接に関連し、それを背景にして生まれた啓蒙主義的世界観の端的な表明であったことが明らかとされた（具体的な議論は、論文① pp.97-109）。

(2) 基礎的研究 2 の研究成果

基礎的研究 2 においては、プロタゴラスの社会・政治思想の全体像を、プラトン『プロタゴラス』の分析を通して解明し、人間尺度説との関係を解明した。また、それとともに、ロゴスをめぐるプロタゴラスの断片を再解釈し、彼の言語思想の全体像を明らかにし、人間尺度説との関係を解明する作業をおこなった。

紀元前 5 世紀における共同体と倫理の思想には、三つの特徴があると見なされている。すなわち、①技術主義的進歩史観、②社会契約説、③ピュシスとノモスの排他的対立図式、である。これらの標準的な見方に対し、基礎的研究 2 では、プロタゴラスの思想を分析する作業を通して、再検討を加えた。まず、プラトン『プロタゴラス』において提示され知得るプロタゴラスの「大演説」を分析し、そこに含まれる社会起源論の内容を検討し、技術主義的進歩史観との共通点と相違点を明確にした。次に、大演説における道徳起源論と社会契約説の関係を考察し、そこにおけるノモスとピュシスの関係性と、アイドース・ディケーという道徳的特質との関連を詳しく考察した。以上の考察を踏まえ、さらに、プロタゴラスの大演説に登場するノモスとピュシスの概念を検討した。

以上の考察の結果として、三つの特徴それぞれについて、次のような新たな知見が得られた。

①共同体と倫理の起源をめぐるプロタゴラスの説明は、技術主義的進歩史観とは異なる発想に立っている。その基本的枠組は紀元前 5 世紀に源流を有するものの、プロタゴラスの発想は、この発想から外れた側面も持っている。

②プロタゴラスによるノモスの説明のなかには、社会契約説の発想はみられない。プロタゴラスによる共同体の成立をめぐる説明は、社会契約説とは異なる枠組に立っており、ソフィストによる社会論は、必ずしも社会契約説に基づいているとは限らない。

③ピュシスとノモスに関わるプロタゴラスの発言は、両者の排他的な対立図式を前提してはおらず、むしろ、両者の密接な相互依存関係を想定している。紀元前 5 世紀におけるノモスとピュシスをめぐる図式は、必ずしも標準的な見方に則ってはおらず、再検討が必要であることが明らかとなった。

（以上の具体的な議論は、論文⑥で詳述されている。）

(3) 基礎的研究 3 の研究成果

基礎的研究 3 においては、「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」の問題を中心に、当時の民俗学的論争や、医学思想、政治思想、弁論術などの多様な論争の文脈を検討し、紀元前 5 世紀の相対主義思想の全体像を明らかにすると共に、その中にプロタゴラスの思想を

位置づける作業をおこなった。すでに、基礎的研究 2 において、プロタゴラスにおけるノモスとピュシスの概念を分析し、標準的な見解の見直しの必要性が明らかになったが、この基礎的研究 3 では、分析の対象をさらにプロタゴラス以外の多様な著述に拡大し、紀元前 5 世紀全体において、「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」をめぐる従来の枠組の見直しが必要であることを明らかにした。

この研究では、まず、「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」をめぐる従来の枠組として、影響力の大きな研究であるハイニマンの『ノモスとピュシス（Nomos und Physis）』(1945) の主張の妥当性の詳細な再検討を実施した。ハイニマンの図式では、ノモスとピュシスは、紀元前 5 世紀の哲学的論争の中で、次第に排他的な対立的概念に変容していったが、そのような対立を強調し、ピュシスを称揚してノモスの価値を剥奪するような価値観を形成していったのが、ソフィストたちであったという。このような説明図式が誤りであることを、主として、プロタゴラスと、アンティフォンの著作の分析を通して明らかにし、ハイニマンの図式が正当ではないことを明らかにした。（具体的な議論は、論文⑧）

その後、この問題をめぐる重要な分析対象として、ヘロドトスの『歴史』と、作者不詳のソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』におけるノモスとピュシスの用法の分析をおこなった。

ヘロドトスにおいては、ノモスとピュシスの概念が重要な役割を果たす箇所であるスキュティアをめぐる記述を取り上げ、その用法を詳細に分析した。その結果、ヘロドトスにおけるノモスとピュシスには、対立的な図式はなく、むしろ、ヘロドトスの異文化の説明のなかで、相補的な概念として用いられていることが明らかとなった。（具体的な議論は、論文②③）

ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』は、プロタゴラスの思想の影響も指摘される重要な文書であり、そこでは、ノモスとピュシスが重要な概念として登場する。そこで、この文献の議論を詳細に分析し、その結果、この文書におけるノモスとピュシスの概念もまた、ハイニマンの図式では説明できない要素を含んでいることが明らかとなった。（具体的な議論は、論文④⑤）

(4) 総合的研究の研究成果

総合的研究では、(1)～(3)の 3 つの基礎的研究を踏まえて、相対主義思想の歴史的起源に対する新しい知見を提示すると共に、研究成果がギリシア哲学史全体に対してもたらす意味を考察した。これによって得られた新たな知見は、以下のようなものであった。

◎プロタゴラスは、現代的な相対主義の源流であると考えられ、そこには、現代の相対主義において批判される主観主義や真理の相対主義などの発想がみられると考えられていたが、実際にはそうではなく、彼の相対主義思想は、現代的な相対主義とは異なる枠組を持つものであった。プロタゴラスは、人間の認識や価値の相対性を認めるが、それは、人間が尺度として世界を計測し、解明していくための大前提なのである。また、倫理思想においても、プロタゴラスの相対主義は、倫理的相対主義を帰結するものではなく、むしろ、人間社会の倫理の豊かな姿を説明するのに役立っている。

◎プロタゴラスの相対主義的発想は、紀元前 5 世紀の知的風土に根ざしており、それを代表するものである。この時代は、相対主義的な人間観や倫理観を前提としながら、そこから、新しい人間的世界を解明し、人間社会の倫理を追及しようとした時代であった。

以上のように、本研究は、当初の目的どおり、紀元前 5 世紀ギリシア世界における相対主義思想の姿を、プロタゴラスの人間尺度説を中心に、多様な観点から明らかにし、それが持っている意義と、現代の相対主義思想に対する可能性を明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①中澤務、プロタゴラスの人間尺度説―その歴史的実像をめぐって―、関西大学文学論集、査読無、66-4、2017、87-113

②中澤務、古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（３）－ヘロドトスとエジプト－、The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture、査読無、4、2017、143-158

③中澤務、古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（２）－ヘロドトスとスキュティア－、The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture、査読無、3、2016、223-236

④中澤務、ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』研究（二）、関西大学文学論集、査読無、65-2、2015、73-90

⑤中澤務、ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』研究（一）、関西大学文学論集、査読無、65-1、2015、73-90

⑥中澤務、ソフィスト・プロタゴラスにおける共同体と倫理、関西大学文学論集、査読無、64-1、2014、55-78

⑦中澤務、プロタゴラスの相対主義再考、アルケー、査読無、22、2014、40-52

⑧中澤務、古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（１）－ノモスとピュシス－、The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture、査読無、2、2014、127-139

⑨中澤務、ゴルギアスにおけるロゴスと弁論術－『ヘレネへの賛辞』研究－、関西大学文学論集、査読無、63-3、2013、23-51

〔学会発表〕（計 1 件）
①中澤務、プロタゴラスの相対主義再考、関西哲学会、2013 年 10 月 19 日、大阪大学（大阪）

〔図書〕（計 1 件）
①中澤務、哲学を学ぶ、晃洋書房、2017、176

６．研究組織
(1)研究代表者
中澤　務　（NAKAZAWA, Tsutomu）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：10241283